學　報
Kobe　College　Bulletin

ISSN0389－164X
NO. 1 8 8
2020. 3 .16
神戸女学院
学報委員会

One in Christ の学びから揺るがぬ展望へ

中学部・高等学部　部長　林　真理子

中高部長任期もあとわずかとなりました。6年間お支えくださった皆様に深く感謝いたします。

今年度は権威的機関が公表している「決定事項」や「実施方針」が次々と覆り、確実なものや信頼できるものを見極めることが難しく、将来への見通しが立たぬ不安な1年でした。昨年11月、2020年度に予定されていた大学入試改革の目玉、英語民間試験の導入の延期が発表され、続いて国語と数学の記述式問題の導入が見送られたことがその端的な例です。かなり以前から明確に問題点が指摘されていたにもかかわらず、大人の都合でぎりぎりのタイミングに試験内容が覆り、準備の努力を重ねてきた多くの若者が大きな影響を受けたことを遺憾に思います。その一方、中高部では短期的な予想に振り回されたり揺らいだりしない、建学の精神の根幹：リベラルアーツを旨としていますので、入試形式についての方針が変わっても動ずることは全くありません。2021年度から中学校の、2022年度から高等学校の学習指導要領が新しくなります。文部科学省のHPでは「主体的・対話的で深い学び」「学んだことを人生や社会に生かそうとする人間性」「未知の状況にも対応できる思考力、判断力、表現力」が強調されていますが、具体的なカリキュラムの変更点について不透明な部分が多いのが現状です。カリキュラム研究の領域では「トップ・ダウンの方式でカリキュラムを開発し普及して教育の生産性と効率性を追求する時代は終わった」（佐藤学著「カリキュラム研究と教師研究」、安彦忠彦編「新版カリキュラム研究入門」p. 159）と言われています。カリキュラム作成が学びと経験のデザインであると言われる昨今、創立以来一貫して中高部で実践されてきた教育の柱は「幅広い分野の知識を身に着ける」「自ら問いを立て考えを深める探究方法を身に着ける」「多様な経験を通して豊かな感受性、相互承認、自尊感情を確立する」ことではないかと思います。

まず幅広い分野の知識習得については、各教科の授業に加え、図書館の果たす役割が大きいと思います。中高部では、生徒が基礎知識を土台にして、主体的に興味ある分野を広げ、教養を深める環境づくりが不可欠であるとの思いから、本校への入学を目指す小学生や保護者に折に触れて「活字に触れ、高い読解力や豊かな想像力を伸ばしてください」と呼

びかけてきました。そのためか読書好きな在校生が多く、図書室の充実ぶりを見て本校への入学の意思を固めた方もいます。蔵書64,000冊の図書室へ足繁く通う生徒も多く、2018年度の年間貸出冊数は11,522冊、2019年度は10月末までにすでに10,621冊となっており、貸出冊数が年々増加傾向にあります。また今年度一番沢山図書を借りた生徒は１月中旬現在565冊借りていますし、200冊以上借りた生徒も９人います。小説のみならず、数学や化学、生物関係の図書も人気です。図書部員がテーマ設定して選んだ２～３冊を封入した「図書福袋」で未知の図書に触れることもできます。生徒の希望等により毎年1,500冊以上の新刊図書が入ることも魅力です。高尾長良氏や瀧羽麻子氏のように中高部で培った力や読書への情熱を基に精力的に文筆活動をされる卒業生の存在は、在校生や教職員への励みとなっています。今後も読書によって想像力や読解力を豊かにし、抽象的思考力を強める文化を大切に育んでいっていただきたいと希望します。

探究方法を身に着けることについては、総合学習「探究」での学びが挙げられますが、その他にも毎日の礼拝をはじめとするキリスト教教育が重要な役割を果たしています。毎年多くの在校生や卒業生が礼拝に登壇して話をしますが、学内外での活動等自分の経験から学んだこと、考えたことをまとめて語ることで、経験を客観的に外から見直して分析し、深化することができます。聴衆は多様な話から、自分とは異なる視点や考え方を学び、興味や視野を広げることができます。宗教強調週間の放課後には礼拝講師や卒業生が「放課後プログラム」の講師として有志生徒の質問に直接答えたり、人生について、将来の進路について、助言をしてくださいます。参加生徒は主体的に問を立て、対話によって考えを深めることを学ぶのです。また、生徒たちは隣人を思いやって仕えることや、自分を支えてくれる周囲の人たちへの感謝、つまり多様な経験を通して豊かな感受性と相互承認をも日々の礼拝から学んでいます。

昨年、全校参加の生徒総会で礼拝前に講堂に入る時の騒音について討議されましたが、高３生から「上級学年になり、礼拝前、静寂の中で友人や家族のために祈っている友に配慮し、静かに入るよう心掛けるようになった。全校が周りの人に配慮し、寄り添う姿勢を持つべきではないか？」という意見が相次ぎ、下級生も建学の精神を体現した上級生の姿勢から学びました。昨年のラグビーワールドカップで日本チームがONE TEAMをスローガンとしていましたが、『神戸女学院百年史　各論』に、寄宿生が「過去の思ひ出」として次のように記しておられます。「第一回の方のMottoは“One in Christ”であって、そを挿櫛に彫りつけられた様に覺へて居る。」（p.87）このモットーはローマ人への手紙12章５節「わたしたちも数は多いが、キリストに結ばれて一つの体を形づくっており、各自は互いに部分なのです。」の精神とのことですが、建学当時からの全校一体となって学び合う雰囲気は現在も中高部に脈々と受け継がれ、学校行事や自治会活動の活気として表れています。

宗教部主催リベラル・アーツプログラム（旧修養会）や釜ヶ崎での炊き出し、他の国や地域の方たちとの交流プログラム、キャリアガイダンス講演会等を通し、多様な経験を卒業後のキャリアや人生設計につなげている生徒も大勢います。先日、礼拝で釜ヶ崎での炊き出し経験について奨励した生徒たちは「以前は周りの大人から刷り込まれた情報を鵜呑みにし、路上生活者に偏見を持っていたが、実際に釜ヶ崎に行ったことで自分の偏見に気づいた。経験から学ぶことは自由な視野を持つために不可欠だ。」「経験からの学びの貴重さは、成功の有無や経験の回数に関係ない。」と述べました。経験から帰納的に学び、自己肯定感を高め、ひいては互いを承認し合い尊重し合う学びが今後も深化し続けるよう、全校で取り組んでいきたいと存じます。

想定外の事象が連続し、将来の展望が不透明な今、そして富の配分の不均衡や男女格差等の問題が解決されぬ今、愛神愛隣の精神の下に集う若き魂がしなやかな知性と折れない心、ポジティブ思考で、神様の呼びかけに応え、隣人に仕える力を育み続けてくださるよう祈念いたします。

KCCだより

〔コーベ・カレッジ・コーポレーション（Kobe College Corporation）は、1920年に神戸女学院のキャンパス移転の資金援助のため設立された、アメリカ合衆国イリノイ州を本拠地とする非営利団体（NPO）です、以来日米両国の学生生徒ならびに教員のためにさまざまな文化交流の機会を創出するなど、有形無形の力強い支援をおこない、神戸女学院はその活動によって大きな恩恵を受けてきました。2004年、KCC はその活動範囲を拡大するために、名前の後に“Japan Education Exchange”という副称を付け加えて、通称 KCC-JEE となりました。今回は発足100周年の祝いについて、KCC-JEE の理事であり、学院評議員でもある水野多美さんがまとめてくださいました。〕

KCC-JEE　100周年の祝い

KCC-JEE 理事
学校法人神戸女学院評議員
水野　多美
（New Jersey, Hoboken 在住）

コーベ・カレッジ・コーポレーション（KCC）は、神戸女学院の岡田山にある現在のキャンパスを購入する際の資金集めのため、1920年にアメリカイリノイ州のシカゴに発足しました。2020年９月、KCC は発足100周年の祝いをシカゴでおこないます。KCC は、アメリカと日本との共同団体として、シカゴを本拠地とする最も古い団体の一つです。この100年の間に、アメリカ国内で、またアメリカと日本との友好関係に困難な時期があったことを思うと、このお祝いができることは素晴らしいことだと思います。

お祝いの会には、以前の KCC もしくは KCC-JEE の理事、KCC をサポートしてくださった友人たち、KCC が送った宣教師の英語教師、Gottschalk 英語教師、Drake 客員教授、KCC-JEE がサポートしたアメリカの大学院生、エッセイコンテストの受賞者、神戸女学院大学のインターシップ参加者、北米に住む神戸女学院の同窓生が招待されます。日本からは、飯院長や、斉藤学長をはじめとする神戸女学院からのゲストと共にお祝いできますことを幸いに思っています。

このお祝いの会は、2020年９月12日（土）に、シカゴ市内にあるパルマーハウスヒルトンホテルにて開催されます。メインスピーカーとして、KC 卒業生でもある森恭子さんが、神戸女学院での教育が、作家、そして大学の教授というキャリアにどのような影響を与えたか、というお話をしてくださいます。森恭子さんは、神戸女学院中高部を卒業され、大学２年の後にイリノイ州のロックフォードカレッジに転校し卒業されました。現在は、米国在住で、今回の会のためにシカゴへお越しいただく予定です。

また、神戸女学院の歴史研究においてもっとも詳しい方と称される石井紀子様にも、これまでの神戸女学院の歴史から米国在住者として気づかれた点をお話しいただくことを楽しみにしています。日本国総領事としてシカゴに駐在されている岡田総領事からもご挨拶いただく予定です。

神戸女学院に関わりを持つ方に少しでも多くご参加いただき、ご一緒にお祝いができればと願っております。未だプログラムも構成半ばですが、ボードメンバー、コミッティーメンバー、引退した先輩ボードメンバーの方のお力も加わり、次の100年をより実りある時を迎えるため、力を合わせてプログラムを練っている最中です。３月には、年次の対面でのミーティングがあり、シカゴ郊外で集まり、今年は、100年祭のことを中心にボード会議が開催されます。

100年祭の中では、KCC-JEE のメイン活動である、５つのプログラムからは、そのプログラムで恩恵を受けた人、すなわち、そのプログラムに参加した人を交えて、プログラム長からのプログラム説明を予定しております。これからのプログラム活動に参加、サポートしていただける方を募っておりますので、ご興味がある方は KCC-JEE へご連絡いただければ嬉しいです。

昨年は、ボードメンバーに３人の新しいメンバーが加わりました。Liv Coleman は博士課程の学生の時に、Graduate Fellow プログラムの受賞者として研究留学。児玉十代子さんは KC 卒業生で在学10年の経験、世界銀行でのスペシャリストとしてのご活

躍中。Abbi Mayland は昨年３月まで中高部で英語教員として滞在していました。彼女たち３名の詳しい紹介は、次回以降とさせていただきます。

この新戦力も加わり、メンバーの入れ替わりもありましたが、次の100年を目指すための一区切り。どのような集まり、お祝いになるか、どうか上手くことが運ぶようにお祈りください。そして、次の100年への素晴らしいスタートとなることを皆さまでお祝いしましょう。

神戸女学院という小さな女子教育機関がもうすぐ150年を迎えられることも、少ない卒業生ながら、長く続いてきた歴史、伝統があることを誇りに思います。東京の某大学、某女子大など、長い歴史を誇り卒業生の数も多いですが、神戸女学院という関わりの中で、小さいからこそ人々が密に繋がりあえることが素晴らしいと思います。

日々の生活や仕事に追われ、なかなかしんどい毎日をお過ごしの方が多いでしょうし、コロナウィルス感染の拡大には、心を痛めることが多々ありますが、基本に戻り、日々の糧に感謝して、今日あることに感謝できる、真摯な気持ちを再確認できればと思います。

100年も前からアメリカに在る、神戸女学院をサポートするためにボランティア活動する団体があることをもう一度思い出し、自分ができることは何、とご自身への問いかけの機会にしていただければ光栄です。

９月の100年祭を乞うご期待。

100th Anniversary Logo
Designed by Kaila Nakamura
2019 High School Essay Contest Winner

2020年度年間標語

主は人の一歩一歩を定め
御旨にかなう道を備えてくださる。
（詩編 37:23）

学院チャプレン　中野　敬一

人生の旅路を歩む私たちには、数多の選択肢が示されています。一瞬で人生が変わるほどの大きな選択と日々の生活における小さな選択といった違いはありますが、その大小にかかわらず、選択した結果によって人生が左右されることは少なくありません。

それゆえに人は進路について悩み、自らの決断に不安を覚えるようになります。また、過去の選択に後悔して自信を失い、その後の人生の足取りが揺らいでしまったりするのです。

残念なことに、人はどの道を選ぶのが最善であるかを知ることはできません。先を見通す能力はなく、そこに人の「限界」があります。けれども、揺るぎの無い確かな足取りで日々を歩みたい、結果として豊かな人生を得たいといった願いを諦めてしまう必要はありません。

この詩の作者は「主に信頼し、善を行え」（３節）と勧めています。「善」は多くの意味を含む言葉でありますが、主なる神と隣人に喜ばれる行為に関係しており、それは「愛神愛隣」を実践することへと繋がります。どの道を行くべきか、という選択に私たちが迫られる時こそ、「愛神愛隣」が輝きを増すように思います。愛神愛隣の視点から考えてみることで、自ずと選ぶべき道が示されるのではないでしょうか。

示された道へと進む一歩一歩は、主が定めてくださると詩人は語ります。愛神愛隣に生きることを願う私たちの歩みが確かなものとされ、神戸女学院が御旨にかなう歩みを続けられることを祈ります。

クリスマス報告

〈 大　学 〉

平和を祈りながらクリスマスの時期をむかえました。例年と同じくクリスマス前の１週間は各学科によるチャペルアワーをまもりました。演奏や合唱、心温まるクリスマスのエピソードをうかがうなど、それぞれ学科の特徴が表れたチャペルアワーとなりました。

クリスマス礼拝当日となる12月20日（金）は授業の時間割を変更し、正午から大学クリスマス礼拝を皆でまもりました。音楽学部による演奏・合唱・奉仕の中での讃美礼拝は、主イエスの誕生を祝い、敬虔な気持ちを思い起こします。

今年は大澤　香チャプレンにより「天使のうた　イエスのうた　私たちのうた」と題してメッセージをいただきました。

クリスマスの夜、飼い葉桶に生まれた救い主イエスの人生は、悲しんでいる人に寄り添い、多くの人に生きる希望を与えるものでした。大澤先生は、聖書における「詩・歌（うた）」の意味などを取り上げ、イエスという人、イエスの物語、すなわち聖書そのものが、「神のうた」と言えるだろうと話されました。私たちは聖書に紡がれた言葉や物語の読み手であるだけでなく、イエスの示した愛の生き方を語り、響かせていくことが求められている存在だと思います。

神戸女学院という学び舎も、途切れることのない多くの愛によって支えられてまいりました。共に礼拝をまもった私たち一人ひとりが、神戸女学院の「愛のうた」を歌い継いでゆく者であることを心に刻む時となりました。

大学クリスマス礼拝の様子

〈 神戸女学院　公開クリスマス礼拝 〉

学院全体でまもられる公開クリスマス礼拝は、今年で47年目をむかえました。

学院オルガニストの片桐聖子氏による前奏が講堂に響き渡り、はじまりを告げました。続いて、高等学部生徒によるハンドベル演奏、招詞、一同による讃美と続きました。今年は大門光歩中高部チャプレンから「あなたの旅路を行きなさい」と題してメッセージをいただきました。クリスマスはキリストの誕生を祝う時ですが、救い主が私たちに与えられた意味を確かめる時でもあります。

聖書には、馬小屋でお生まれになり、神の子でありながらも徹底して人に仕え、友のために自分の命を捨てるという生き方を選ばれた救い主の生涯が記されています。愛に根差したキリストの道が示されています。それは暗闇を照らす希望の光であり、その光を従えて私たちが歩んでいくことを、神は真に求めておられるのです。

神戸女学院では創立以来、キリストを模範とする生き方を教育の原点としています。神の呼びかけに耳を傾け、その声に応えて生きることを体得した大勢の者が、神に遣わされる場所へと巣立ってゆきました。今、学院に連なる私たちも神の導きを信じ、キリストの後を従い歩む旅路を、勇気と希望を持って踏み出す者でありたいと思います。

学院全体が大切にまもっているこのクリスマス礼拝は、神戸女学院がキリスト教主義学校であることを強く伝えられる大きな機会であり、共にひとつの祈りの時を持つことができる大切な場です。次年度以降も主の恵みに共に与かるひと時を、一緒に過ごしていただけるよう祈るものです。

司式：中野　敬一　　奨励：大門　光歩
指揮・編曲：松浦　修
合唱・管弦楽：神戸女学院大学音楽学部
ハンドベル・中高部コーラス指揮：喜多　牧子
奏楽：片桐　聖子

〈 プレゼント・献金報告 〉

★施設へのプレゼント★

今年も、大阪水上隣保館と神戸真生塾、福島にある社会福祉法人 牧人会白河めぐみ学園と白河こひつじ学園へプレゼントをお届けすることができました。神戸真生塾には、J家庭科研究部による手作りの小物と、S料理研究部が焼いた名前の入ったクッキーを合わせてプレゼントしております。また、中高部自治会の方々が、サンタクロースの代表としてプレゼントを運んでくださいました。

今回は、大阪水上隣保館と福島には郵送いたしましたが、誰かがあなたのことを思い、支えたいと思いを寄せているその気持ちだけでも子どもたちに伝えることができるよう、これからもおこなっていきたいと思います。ご協力いただいたすべての方々に感謝と共にご報告申し上げます。

皆様、ありがとうございました。

（チャプレン室）

〈中高部クリスマス燭火賛美礼拝報告〉

12月18日（水）、講堂にて中高部のクリスマス燭火賛美礼拝を守りました。

礼拝前、照明を落とした講堂の壁には救い主の降誕の場面が映し出され、パイプオルガンによる前奏曲の響きによって厳かであたたかな雰囲気がつくりだされていました。

招きの言葉から礼拝ははじまりました。S2音楽選択者によるハンドベルの清らかな演奏に続いて、JSコーラス部生徒が讃美歌を歌いながら入堂してくると、講堂全体が聖堂にいるかのような雰囲気に包まれました。

聖書の朗読と賛美を交互に捧げながら、クリスマスの出来事を振り返り、その意味を確かめる時を守りました。

この日は岡本教会の栗原宏介牧師により「織りなされる物語」という題で説教をしていただきました。栗原牧師は救い主であるイエス・キリストがお生まれになった馬小屋は、居場所のない人々のもとに救い主が現れたことのしるしであると話してくださいました。また、中島みゆきの「糸」を引用し、縦の糸は神と人とのつながり、横の糸は人と人とのつながりで、その糸を織りなしながら、私たちは共に、温かさや心強さを携えて生きてゆくのだと話してくださり、クリスマスの意味、喜びを改めて確かめる機会になりました。

礼拝の中で講堂の檀上にキリストを象徴するローソクと、信仰、希望、愛を象徴する3本のローソクに火が点され、私たちの心に点された希望の光について考える時が与えられました。それぞれの心に灯された光をつないでゆくためにも、お互いのことを思いやり、お互いのために祈る者でありたいと感じました。

司会者の祈りの中で、檀上に灯された火がキリストの教えられた信仰、希望、愛の象徴であることが触れられ、それぞれの心にもクリスマスの灯が灯されたことを感じました。その灯を隣人のために掲げて歩む者でありたいと思います。

今年は、中高部の終業式がJS別で執りおこなわれることになり、この礼拝の中で、讃美歌コンクールのJS優勝クラスによる演奏がありました。優勝クラスの演奏はどちらもすばらしいものであったと思います。

「いそぎきたれ」を繰り返し歌いながら退堂して礼拝は終わりましたが、それぞれの者が新しい希望と決意をもって講堂を出発する機会になったと感じています。

すばらしい礼拝のためにご奉仕くださいましたすべての皆様に心から感謝いたします。

（JS宗教部）

史料室の窓(51)

キャンパス探訪（5）

宣教師の遺産 ― オルチン・ロード

神戸女学院史料室　佐伯　裕加恵

正門を入って緩やかな坂道をあがってゆくと、正面に音楽館が見えてきます。春の季節なら緑の木立の中から桜と共に、秋なら美しい赤い色をした紅葉の隙間からクリーム色の優美な姿を見つけることができます。通学路は途中で車道と交わり、道はやがて二手に分岐します。左側の緩やかな坂を行くとその先は階段になっていて、音楽館を左手にしてそこから漏れ聞こえてくる音楽に耳を傾けながら山の上の校舎へと続いていきます。このメインロードに並行して通学路を見下ろすように一段高い位置に作られている右側の道は山道になっています。普段あまり人が通らないので舗装されていません。この道を通ったことのある人は少ないかもしれませんね。しかし実はこの道、学校にとって意味のある重要な道なのです。ちゃんとした名前がついているのですから。この道はオルチン・ロードと呼ばれています。音楽学部１号館の横の斜面に建っている建物、オルチン記念音楽館、これと同じ名前ですね。このオルチンというのは人の名前です。どうして建物と道の両方にオルチンさんの名前が付けられているのでしょうか。歴史的に言えば、建物よりも道のほうが古いのです。音楽館は神戸女学院創立100周年を記念して建てられましたから30年ばかり前（1988年）のこと。しかし道の方は1933年、神戸女学院が岡田山に移転してきたときに、誰言うことなしにオルチン・ロードと呼ばれてきたので87年の歴史があります。では、この由緒正しきオルチンさんとはどのような人だったのでしょうか。

Rev. George Allchin（1852-1935）は宣教師でした。神戸女学院を創立した Miss Eliza Talcott（1836-1911）、Miss Julia Elizabeth Dudley（1840-1906）を日本に派遣したアメリカの海外伝道団体 American Board of Commissioners for Foreign Missions（通称アメリカンボード）から日本に派遣されました。オルチンさんは教師としてではなく、伝道活動を主とした宣教師本来の活動をした人でした。とはいえ、音楽が得意で、大阪の梅花女学校（現・梅花女子大学）や神戸の女学校（現・神戸女学院）で音楽を教えていましたから、学校とのかかわりが皆無だったわけではありません。歌う宣教師として知られていて、幻灯機（今でいうならスライド映写機）を使ったパフォーマンスでも有名でした。映像を伝道活動に用いる、映像パフォーマーといったところでしょうか。

そして特に日本におけるオルチンさんの大きな功績は讃美歌集を編集したことです。現在私たちが使っている『讃美歌21』の元になったプロテスタント合同日本語讃美歌のメロディを作り、編集したのがオルチンさんでした。この讃美歌を作るために個人で様々な教派の讃美歌を収集していました。原稿を作って印刷所に預けた直後に火事でコレクションを喪失するという不運にも見舞われましたが、その後再び収集をはじめ、集めた讃美歌は日本における最大の讃美歌コレクションとなりました。宣教師を引退して帰国するにあたってその貴重なコレクションを神戸女学院に託されました。神戸女学院蔵オルチン・コレクションです。

オルチン・ロード

オルチンさんとの関わりはそれだけではありません。この岡田山キャンパスにも関わりがあります。キャンパスの設計はもちろん皆様よくご存じの Mr. William Merrell Vories（1880-1964）ですが、オルチンさんは庭の設計に携わりました。音楽館前の広場の樹木の位置を、あの一段高い道に立って指示されたとか（当時は今のように木に覆われていなかったので、あの道から下がよく見渡せたのです）。ですからオルチンさんの立っておられたあの道は、いつしかオルチン・ロードと呼ばれるようになったのです。

多くの人々の献身と祈りに支えられて完成した岡田山キャンパス。日々美しい景色を見るたびに、古の老宣教師の姿が木立の間に垣間見えるような気がします。

＜キャンパスお気に入りの場所＞

図書館新館 iLib（アイリブ）

「日本一美しい」と言っても過言ではない、神戸女学院のキャンパス。多くの素敵な場所が既に皆様によって紹介されているようですので、今回は、図書館新館 iLib（アイリブ）をとりあげたいと思います。活気がある場所だと感じ、気に入っています。

図書館新館は、1984年に建てられましたが、１階と地下１階は2013年に、図書館に集まる情報を活用するためにディスカッションやプレゼンテーションができる場所、iLib（ラーニングコモンズ）として改修され、現在に至っています。プロジェクターやパソコンを駆使しての授業はもちろんのこと、講習会やイベントにも使用されています。利用者は可動式テーブル等を使って、グループで相談したり、プレゼンテーションの練習をしたり、思い思いに学習を進めています。１階には、大学院生のスタッフがいて、論文やレポートの書き方のアドバイスも受けることができます。特集、こんな本どうでしょう等のコーナーは、思いがけない本との出会いが期待される場所とも言えます。新聞・雑誌コーナーの近くにはソファがあり、休み時間にリラックスできるので、ほっとします。

最後になりましたが、これからもより多くの利用者に iLib で有意義な時間を過ごしてもらえるよう、考えていきたいと思っています。キャンパスの外観の美しさに負けないよう、図書館の中身を充実させたいと願っています。

（図書館職員）

図書館新館１階 iLib

開かれた空間

私のお気に入りの場所は「中庭」とそれを取り囲む校舎のつくる空間です。

中庭には真ん中の噴水から十字の通路が交差しており、４つの建物（総務館、文学館、図書館、理学館）が囲むように並んでいて実に美しいスパニッシュ・ミッション・スタイルの開放的な建物群です。

これらの建物と建物の間を結ぶ回廊で結ばれる空間は、渡り廊下で外部に出入りすることができます。閉ざされた空間のようでその実、開かれている。人材がここで育って出て行き、懐かしくなったらまた帰ってくる感じです。

昔、調和の美しさに「建物は教育する」という言葉が浮かんできて周りの人に話したら、先輩職員からそんなこと言ったらあかんよと言われたことを思い出しました。良い影響を与えるのは人と建物すべてを含んだ教育ですから。

６月末に噴水前で白い花の咲くユッカが学生たちから「夏休み草」と呼ばれていました。この花が咲くと夏休みが近いということです。

世界は開かれています。人とともにある風景、いつまでも変わらない愛神愛隣の教育というのが私の好きな場所の理由かもしれません。

（音楽学部事務長）

中庭

大 学 報 告

「話す、伝える、伝わる」

文学部 英文学科　3年生

2019年12月7日(土)、「話す、伝える、伝わる」というテーマをもとに、本学文学部英文学科卒業生のＮＨＫ国際放送局 World News 部エグゼクティブアナウンサー（現在、NHK Newsline アンカー）山本美希さんによる学生主催文学部講演会を開催いたしました。

山本さんには、「人にはおのおの、負うべき自分自身の重荷がある」という聖書の一節をご紹介いただき、人は誰しも何かの役割を担っていて、それに対して責任を持って行動することが大事だと教えていただきました。役割＝架け橋、つまり一人ひとりが責任を持って自分の役割を果たすこと。画面の向こう側にいる人たちに対し架け橋となって、正確で公平なニュースを伝えるために多くの工夫をされていることがわかりました。

また、ニュースを受け身の形で聞くだけではなく、飛び交う情報の中から自分に何ができるのか、何が正しいのかを見極めて行動することが、この社会をより良くするのだと改めて感じました。

今回のテーマを意識しながら、自分に与えられた役割を最大限に全うし、言葉だけでなく心のキャッチボールを穏やかに、軽やかにできるようになりたいです。

企画から運営まで自分たちで考え、より良いものにするにはどうすればよいかと何度も検討しました。実行委員として当日の不安もありましたが、多数の温かい感想をいただき安堵しました。たくさんの方々に支えられ多くのことを学ばせていただきました。心より感謝申し上げます。

山本美希さん（中央）と実行委員

ラグビーワールドカップ ボランティアで得たもの

文学部 英文学科　4年生

私は9月から10月におこなわれたラグビーワールドカップのボランティアスタッフとして活動しました。私が担当したのは、神戸会場に設置された「街なか＆ファンゾーンガイド」です。ワールドカップ日本大会に訪れる観客の皆さまをお迎えおもてなしをし、存分に楽しんでいただく役割です。

私はファンゾーンのリーダーとして活動しました。はじめは年齢の異なる方々の前に立つことや、年上の方に自分が指示を出すことに抵抗がありました。そのためまずお互いを知り、少しでも壁をなくそうと、ボランティアをしながら会話を大切にしました。また、天候や気温の変化が激しい時期であったため、体調に気を配り、こまめに休憩をいれるなど心がけました。1日の活動が終わるたびに、「リーダーお疲れ様。楽しく活動できた。」などの声をいただき、やりがいを感じました。

スポーツボランティアは私にとってはじめての経験でしたが、何かを通して人と繋がることの楽しさを感じました。対戦国であっても一緒にお酒を飲んだり、ダンスをしたりと国境を越えて楽しむ人々、日本は素晴らしいと褒めてくださる海外の方、年代の異なるボランティアスタッフ、普段なかなか出会うことのない人々とラグビーを通して出会えて貴重な体験でした。世界中の観戦者やボランティアスタッフ全ての関係者も“One Team!”となりたくさんのことを学び自分自身も楽しみ、視野を広げることができたボランティアでした。

パブリックビューイング会場にて

国際女性ビジネス会議

文学部 英文学科　３年生

今回私はこの会議に参加し、海外の外務副大臣、大使の方、有名な企業のCEOや社長の方など多くの日本や世界で活躍されている方の貴重なお話を聞くことができました。私がこの会議を知ったのは、英文学科特別プロジェクトのアルディーン千浩さんに教えていただいたことがきっかけです。その際に大学生や高校生も参加できるマッチングスポンサーという制度を知り、それを利用して参加しました。会議の中で一番多く話されていたのはジェンダーの話でした。日本では男女雇用機会均等法と男女共同参画社会基本法といった「男女平等を目指す」という法律が何十年も前にできたにもかかわらず、まだまだ男女平等は達成できていないこと。そして、それは日本だけではなく他の先進国でも、まだ男女の格差は残っていることを話してくださいました。私は高校から女子校に通っているせいか、今まで男性と差別された経験がありません。しかし現在、小学校でも名簿が男女で分けられていて男子を先に呼ぶ学校などがあるという話を聞き、とてもショックを受けました。まだまだ自分の知らないこういった問題がたくさんあるので、これからの課題は、現在日本で起きている女性差別の問題をもっと調べることだと思いました。また、ダイバーシティについてもとても考えさせられました。企業成長とダイバーシティの関係というトークショーの中で「イノベーションにはダイバーシティが必要だ。」というお話がありました。私はこの話を聞き、将来はさまざまな国籍の人がいて、みんなそれぞれ違った価値観を持っているが、互いに認め合い尊敬する、そんな環境の中で働きたい気持ちが強くなりました。しかし、そういった環境の中では、阿吽の呼吸で仕事することが難しということも教えていただきました。いいことばかりではなく、その環境で起きうる問題もあることを理解し、うまくつきあっていきたいです。

会議がはじまる前の様子

日本とフィリピンでの文化・価値観の違い

人間科学部 心理・行動科学科　２年生

2019年８月28日(水)から９月８日(日)までの約２週間、国際協働ボランティアのスタッフとしてフィリピンに行ってきました。

主な活動としては、フィリピンの小学校の子どもたちに食育と環境に関する授業をおこなうこと、子どもたち全員が座って食べることができる食堂のスペースを作ることでした。１つ目の授業に関しては、現地に行く前から何度も打ち合わせを重ね、小学校の子どもたちに分かりやすく、かつ楽しく授業に臨めるような内容となるよう意識しておこないました。２つ目の食堂スペースづくりに関しては、砂を校庭から集め、水を運び、セメントをこねるという土木作業を学生自らが主体となっておこないました。何もない状態から作りあげるということでとても大変でしたが、フィリピンの現地スタッフと共に励まし合いながら、完成させることができました。完成した際の子どもたちの笑顔を見ると疲れは吹き飛び、一生懸命作り上げて良かったと感じました。

私は、フィリピンでの生活を通じて異なる文化や価値観に沢山触れることができました。最初は文化が違うことで戸惑うことも沢山ありましたが、日本人の仲間の存在と陽気なフィリピン人の存在のおかげでとても充実した刺激的な日々を送ることができました。この経験は私にとって自分を成長させ視野を広げさせてくれた貴重な経験となりました。フィリピンに快く送り出してくれた両親には心から感謝をしています。

授業終了後に子どもたちと写真

岡田山集会所の女学院カフェ
（地域創りリーダー養成プログラム）

地域創りリーダー養成プログラムとして、岡田山市営住宅の集会所でのイベントをはじめたのは2015年でした。福祉分野に興味のある学生のグループが西宮市の社会福祉協議会と、市営住宅の自治会の協力を得て岡田山集会所と能登集会所でクリスマス会を実施しました。岡田山住宅は高齢化、孤立化が進み、イベントに参加して久しぶりに会ったり、話をしたという人たちもいました。西門のすぐ下の団地の実態を知り、関心を持ち活動の場所にさせていただきました。

2016年は「ひろばカフェ with 神戸女学院」として、イベントを４回実施。シルバー川柳かるたは笑いを取りましたし、絵本の読み聞かせも新鮮でした。クリスマスリースも作りました。2017年は「女学院カフェ」を４回実施。農地で収穫した麦で麦茶づくり、サツマイモでスイートポテト餅調理もしました。クリスマスは、部活動（ギター・写真・美術）とのコラボもありました。2018年も４回実施。煎茶道部をゲストに迎え、お点前披露やケーキデコレーションが好評でした。2019年は、風船バレーが盛り上がりました。手作りのクリスマスカードをプレゼントしましたが、今までも、毎回学生手作りのものを持って帰ってもらいました。子どもの参加も多く、親子連れもいて、にぎやかな会になりました。少しずつ、地域の人たちに馴染みのイベントになってきました。社協の皆さん、自治会の皆さん、参加された方に感謝いたします。

（人間科学部教授　小林 哲郎）

クリスマス会での一コマ

舞踊専攻第11回卒業公演

去る12月12日（木）から14日（土）に、本学エミリー・ブラウン記念館の舞踊専攻スタジオＡにて、第11回音楽学部音楽学科舞踊専攻卒業公演がおこなわれました。公演一作品目は、専任教授の島﨑が第10期生のために振り付けをしたPainfully Goodの再演で幕を開けました。初演の時の７名から今回の10名になったことで多少振付が変わったこともありますが、初演と今回の公演を観られた方の中には、やはり違う踊り手が踊ることによって作品というのは変化していくものなのだということを感じられた方もいらっしゃったのではないでしょうか。二作品目は佐藤唯氏の振り付けによる、Antsという作品が上演されました。作者曰く、蟻というのは仲間が死んだ時にそれを弔う習性があるということからヒントを得た作品で、激しい動きからはじまり、終わりに向かって美しい群舞に移行して行きながら死というものに向かっていく儚さのようなものを表現しました。そして最後の作品はTen、もちろん４年生10名を指したTenです。言葉以外の方法で観客の心の中に入り込み、言葉よりも強いインパクトで我々の思いを感じさせることはできるのだろうかという課題に取り組んだ作品です。学生たちは、細かく速い動きをしながらもテクニカル的にならずに物語を表現するという難題に挑んだ結果、本番の何日か前に見事にそれをクリアし、作者の思い描いていた世界観を観客の方々に感じさせることができたと思います。

（音楽学科教授　島﨑 徹）

「TEN」 振付：島﨑 徹

第10回絵本翻訳コンクール表彰式

第10回絵本翻訳コンクールには、全国308校より1,582点の応募作品が寄せられた。課題絵本は“If I Was a Banana”。ニュージーランドのにぎやかな田舎町ハヴロック・ノースで気さくなレストランを営むアレクサンドラ＝タイリーの文に、高い権威を誇る「世界のイラストレーターベスト200」にその名を連ねたこともある若きマルチ・クリエーター、キーラン＝ラインハートが絵を添えている。

そんな異色コンビが世に贈った作品が描くのは、ある男の子の自己対話。「もし僕がバナナなら？　鳥なら？　スプーンなら？」と自分を何かに照らしつつ、潜心の末に男の子がたどり着いたのは、自分は自分のままでいいという確信。そして男の子は広い外界へと駆け出してゆく。その姿をさりげなく見守るのは、見開き一面の空に浮かぶ雲へと姿を変えたバナナや鳥やスプーン。この終幕の隠し絵は、息を呑むほど美しい。

厳正な審査を経て選出された入賞者（最優秀賞１名、優秀賞１名、佳作３名、審査員特別賞２名の計７名の高校１～３年生）並びに引率者を招いて、去る2019年12月14日（土）、社交館 KCC ルームにて表彰式が開催された。

学長挨拶で幕を開け、審査員による作品解説、本学出身の人気絵本作家・真珠まりこ審査員長による総評、最優秀賞・優秀賞受賞者による作品朗読、佳作・審査員特別賞受賞者による挨拶、そして茶話会、キャンパスツアーへと催しはとり運ばれた。

三度目の正直で受賞に漕ぎ着けたという入賞者からほとばしる翻訳熱を肌で感じ、頬が緩んだのとは裏腹に、審査員として身が引き締まる思いがした。

（英文学科准教授　中村 昌弘）

表彰者と斉藤言子学長および審査員

「神戸女学院の100冊」書評コンテスト

「神戸女学院の100冊」（https://www.kobe-c.ac.jp/learning/lap_100）は、神戸女学院大学の教員が専門分野の学びの基礎となる書籍を選び作り上げた選書集です。３学部５学科の、人文科学、社会科学、自然科学から芸術にわたる19分野に分けられた本たちはすべて、本学でリベラルアーツを学ぶ大学生の道標となり、新たな世界への扉を開いてくれる珠玉の一冊です。

この100冊をより広く知っていただくために、2015年度から書評コンテストを開催しています。本年度より、高校生部門を廃止し大学生のみの応募といたしました。これは、本来の「100冊」の目的が、本学学生がリベラルアーツを学ぶうえでの手がかり・道標となる、ということでありましたので、原点に立ち返ろう、ということであります。

各分野での選考を経て、最優秀賞、優秀賞、佳作を選出していますが、力作が多く、選考には毎年苦労します。今年度は、深い読書体験と高い共感性が感じられた３名の学生さんが、それぞれ優秀賞、佳作に選出されました。受賞された皆さんに、心よりおめでとうと申し上げます。書評を書かれた経験は、応募者の皆さんの今後の学び、そしてこれからの人生に有益なものであると確信しています。

「神戸女学院の100冊」は、決して固定されたものではありません。大学や社会、そして時代の変化に合わせてアップデートし、様々な場面で活用していこうと考えています。今後も、大学での学びの入り口として、また大学での学びの証として、学生の皆さんから多くの素晴らしい書評をお寄せいただけたらと思っています。

（副学長・教務部長　立石 浩一）

書評コンテスト表彰式にて

神戸女学院大学音楽学部定期演奏会2019

2019年11月26日(火)、神戸女学院大学音楽学部定期演奏会2019が兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホールにて開催されました。

今年度から音楽学部には管楽器セクションに新たな楽器専攻が加わり、ウィンドオーケストラの授業がスタートしましたが、その成果を披露する舞台として第１部はウィンドオーケストラの演奏で幕開けとなりました。第１曲目、バーンズ作曲のアパラチアン序曲はノース・カロライナのパブリックスクールの委嘱により1988年に作曲された作品で、本学非常勤講師・的場誠治先生の指揮でオープニングに相応しい色彩豊かで変化に富んだ演奏が披露されました。第２曲目はラヴェルのバレエ音楽「マ・メール・ロワ」。この作品はもともとピアノの連弾作品として作曲され、ラヴェル自身により管弦楽版にも編曲されていますが、今回は小野寺真編曲の吹奏楽版がザビエル・ラック准教授の指揮でしっとりと演奏されました。

舞台転換の合間に島﨑徹学部長と合唱指揮・山口英樹氏のお話があり、引き続き音楽学部コーラスによる合唱作品が演奏されました。１曲目にホルスト作曲のアヴェ・マリア。無伴奏で歌われるこの作品では、清澄な声の響きが空間に美しく広がり包み込まれるような時間でした。２曲目には上田真樹作曲の女声合唱とピアノのための組曲「夢の意味」全５曲が齋藤遥佳さん（本学伴奏要員）のピアノ伴奏で演奏されました。詩は林望氏の書下ろしで、第１曲「朝あけに」、第２曲「川沿いの道にて」、第３曲「歩いて」、第４曲「夢の意味」、第５曲「夢の名残」、しなやかなピアノ伴奏に乗って、心地よい美しいハーモニーが展開されました。

プログラム第２部はプロコフィエフ作曲　ピアノ協奏曲第３番作品26が、オーディションによって選ばれた大学院１年生の学生をソリストに迎え、松浦修准教授の指揮で演奏されました。数あるピアノ協奏曲の中でも難曲と言われるこの作品は、ピアニストの並外れた技量も求められますが、管楽器にも超絶技巧の部分が多々あります。オーケストラメンバー、指揮者、そしてソリストが総力を挙げてこの大曲と取り組み、端正な美しい演奏が繰り広げられ、会場は大きな拍手で包まれました。

この日、最後のステージはレスピーギ作曲の交響詩「ローマの松」。ここではエネルギーと集中力が結集した熱い演奏が披露されました。第１部「ボルゲーゼ荘の松」、第２部「カタコンベの松」、第３部「ジャニコロの松」、第４部「アッピア街道の松」。舞台裏から響くトランペットの音が遠くで響くグレゴリオ聖歌を表したり、客席左右上階からバンダの管楽器が鳴り響いたり、まさに立体空間の中で音に囲まれるような素晴らしい体験ができました。

会場には懐かしい教職員の方々をはじめ、高校生や保護者の皆様など800人近くのお客様にお越しいただき、盛況のうちに演奏会を終えることができました。音楽学部の定期演奏会にご支援、ご協力くださいましたすべての皆様に心より感謝申し上げます。

（音楽学科長　佐々 由佳里）

神戸女学院大学音楽学部定期演奏会2019

2020年度大学入試結果中間報告（2/25現在）

2020年２月25日（火）現在において、AO および指定校制推薦、音楽推薦、KCH 推薦、公募制推薦、クローバー推薦、帰国子女、社会人の各入試を昨年の内に、また、年が明けてからは一般前期Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ日程および大学入試センター試験を利用する入試（センター利用）前期日程が済み、残すは一般後期日程およびセンター利用後期日程のみとなっています。

現時点での概況ですが、主だった入試制度の志願者の状況は以下のとおりです（全て延べ数）。

入試制度	AO	公募制推薦	一般入試前期				センター利用
			Ａ日程	Ｂ日程	Ｃ日程	Ｄ日程	前期
2019年度	52	650	1246	585	365	263	502
2020年度	55	681	1034	530	366	316	402

昨年度と比較すると年内に実施した AO 入試および公募制推薦入試においては志願者数が増えましたが、年明けに実施した一般入試前期Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ日程およびセンター利用入試前期日程においては、残念ながら大きく志願者を減らすこととなりました。

大学入試改革に伴い、次年度から大学入試センター試験が共通テストに変わることから、受験生の浪人回避の傾向が強く出ること、それにより受験生心理が超安定志向となることは昨年度から予見していたことではありますが、他大学の状況と比較しても本学の減り幅は予想以上に厳しいものとなっています。

今年度入試はまだ終わっていませんが、次年度以降も18歳を基本とした受験者人口の減少が続いていく環境であり、その環境下でそれぞれの大学が近年生き残りをかけた施策を講じています。本学においても今般の大学入試改革を好機ととらえ、中長期的な視点に立って神戸女学院大学の未来を、分かりやすい形で学内外にアピールしていく必要があると考えます。そのうえで、入学試験においては、本学が求める入学者を得るための方式、問題の形式等を改めて検討し反映させていかなければなりません。

入学センターとしてももちろん努力を続けてまいりますが、神戸女学院に連なるすべての皆様からのお知恵とお力をお寄せくださいますようお願い申し上げます。

（入学センター課長）

＜留学生紹介＞

Thank you

サムヒューストン大学交換留学生

I'm very glad that I was able to come to Kobe College. My experience here has been filled with kind people, beautiful places, and amazing memories. When I first came here, I was afraid that I wouldn't be able to make any friends. My Japanese ability was really low and I also felt shy, in part because I had never been to Japan and didn't know what I would experience. Also, I am the first student from Sam Houston State University to come to Kobe College as an exchange student, so I didn't have anyone who could tell me what to expect. I'm so happy to say that in my short time here, I've met so many friendly people; both regular KC students and my fellow exchange students. I was lucky to work in English Zone and meet so many girls who are interested in speaking English and learning about other cultures. Through working there, I was able to hear so many of Japan's unique charms that I think I otherwise never would have learned about. With the KC students designated to be my "Buddies", I visited many of Kansai's famous places, like Osaka Castle and the Kobe Luminarie. I also discovered many local places, like the Takarazuka Revue, which was amazing to see. Through all of these happy memories, I will always look back on my time at Kobe College with gratefulness. 本当にありがとうございます！

ありがたい思い出を作りました

淑明女子大学交換留学生

はじめて日本に来た時、日本語が一つもできない状態だったので心配しました。「生活はうまくいくだろうか」などの心配が多かったです。そんな状態で来た神戸女学院大学はとても親切な所でした。

はじめて来て感動的だったのは国際交流センターの方たちの親切さでした。初日から迷わないようにバディを同行させてくださり、信頼感がわきました。留学生の授業の教室へいらっしゃって、私どもの面倒を見てくださる姿にとてもありがたく思いました。いろんな行事についてメールをいただいて、ふと思い浮かんだ分からないことを聞いてもいつも親切にしてくれてとても助かりました。韓国に帰ってもこのように親切で温かい方々にはなかなか会えないと思います。

神戸女学院大学に来て一番幸せなことは今のバディに出会えたことです。空港に着いた初日から、私を待って荷物を持ってくれる姿が頼もしく思えました。バディたちは私を連れて大阪から神戸まで色んな所を案内してくれたり一緒に遊んでくれたりしました。一番ありがたかったのは私が日本人の友人をたくさん作りたいと言うと自ら自分の友人を紹介してくれたことでした。おかげで神戸女学院大学の友人もたくさんできたし、東京にも友人ができました。一学期の間だけ続く単純な関係ではなく、一生続く友人ができてとても幸せです。

寮の友人にも感謝しています。掃除などよく分からない時も親切に手伝ってくれて先に親しくなりたいと言ってくれて、たくさんの思い出を作りました。いつも夕方の礼拝が終わったら聞き取れなかった部分はないかと聞いてくれて、たくさん教えてもらいました。

一学期という短い時間でしたが、神戸女学院大学で得たたくさんの思い出と感謝の気持ちをいっぱい積んで帰りたいです。帰るまでの時間がとても惜しいです。交換留学生という人生の１回だけの機会を神戸女学院大学で送れて本当によかったと思います。みんなにとても感謝しています。

一学期の留学生活を振り返って

徳成女子大学交換留学生

ときめきと緊張に震える心で神戸女学院大学に来たのが昨日のことのようですが、もうこのような送別のあいさつをしているなんて実感が湧かないです。

神戸女学院大学での４ヵ月は、短い期間だったにも関わらず、たくさんのことがありました。毎日のように新しい人々と交流したり、母国語ではなく他の言語で意思疎通しながら関係を形成したりしました。その過程で、教科書的な言葉ではなく、日本人が日常生活で実際に使う言葉も学びながら、日本語の実力を高めることができました。ホームステイや山口小学校交流会などいろんな機会を通じて、日本の文化についてもっと知ることができました。

ここに来てから起きたたくさんのことが楽しかったですが、大変なことが起きた時もありました。そのようなことも良い思い出にできたのは、ここで出会った方々の助けのおかげです。国際交流センターの先生たちは留学生活の中で難しい問題について、いつも助けてくださいました。バディたちも同じ学生の目線で、学校の生活や日本語の勉強を手伝ってくれました。そして、一緒に食事をしたり、遊びに行ったりしながら、いい友人、そして日本語の先生になってくれました。寮生活でよくわからないことがあったり、困ったことがあったりしたら、寮の先生たちと寮生たちがみんな親切に手伝ってくださって、無事に生活することができました。その他にも神戸女学院大学の多くの学生たちが、韓国に関心を持って私に近付いてきてくれて、日本人の学生たちとたくさんの交流ができて、日本にもっと深く興味を持つようになりました。

皆さんのおかげで、日本での生活を豊かに楽しみ、良い思い出を持って韓国に帰ることができます。一学期の間ありがとうございました。

「来てよかった」と伝えたい

文藻外語大学交換留学生

私は外国語に大変興味を持っており、日本語の柔らかい思いやりのある特徴に惹きつけられたので、日本語を専攻することに決めました。しかし、台湾で日本語会話能力はどうしても獲得できなくて、日本に留学しようかなという考えが湧いてきました。その考えは既に実現し、そろそろ終わりに近づいているなんて、かなり不思議だと思います。

留学を申し込む際に、神戸女学院大学を第一志望とし、申請しました。なぜかというと、神戸女学院大学のウェブサイトを見ると、学校には国際交流に関心を持っている学生が多く、留学生と日本人の学生の間にギャップのない感じがしたからです。それは日本語の会話能力を上達させたい私にとってとても印象的でした。実際に神戸女学院大学に来てみると、交流活動はウェブサイトで記載されていた通りたくさんあるし、学生さんも留学生をあたたかく受け入れてくださって積極的にコミュニケーションを取り、異文化交流が数多くできました。そのため、私ははじめての海外生活の不安が自然に和らぎ、会話も前よりできるようになりました。

また、最も印象に残ったのは神戸女学院大学の自然環境です。学内で緑色の森林を満喫できるし、歴史を刻む建物があり、四季を味わえる非常に美しい学校だと思います。

１年が経ち、日本語はまだペラペラ喋れるようになったわけではないですが、私は神戸女学院大学で学んだ「私はまだ、私を知らない」という精神を持って、日本語の勉強を続けていこうと思います。自分に足りないところと将来について不安に感じることもありますが、自分がまだまだ伸びていけると考え、何でも知ろうとしつづけることを人生の指針とし頑張ります。

あらためて、神戸女学院大学にて交換留学できて良かったという思いをみなさんに届けたいです。

＜派遣留学報告＞

アサンプション大学

My first Philippines

文学部 英文学科　２年生

２年生になったら派遣留学をする。これは私が神戸女学院に入学してからの一番の目標でした。留学当初は生活のすべてが英語という環境に戸惑いもあり、会話をするたび緊張していました。人見知りの私は友人ができるか不安でしたが、私が話しかけるよりも先に現地の生徒がたくさん話しかけてくれたのでわからないことがあってもなんでも相談できました。また些細な質問であっても教授に聞きに行ったりダンス部に入って友人をつくるなど、英語で会話する機会を増やしていきました。フィリピンでの生活で何より嬉しかったのは日本が好きという人が多かったことで、日本について質問してもらえたり、外国人が思う日本の良いところを聞くことができました。日本にいるだけでは気がつかない日本の良さを知るとともに、経済が発達している日本だからこそ問題視されづらい世界の貧困や環境問題の現状についても学びました。ダンスや演技の授業も履修しましたが、ただ演じるだけでなく相手に伝えるための表現力も学びました。言葉だけでなく表情や体全体が対話の材料になり得るのだと知りました。この知識は今後のプレゼンや面接で大いに活かされると思います。この留学を経て、英語で話す際の躊躇いや緊張がなくなったように思います。それは温かく迎えてくださったアサンプションの皆さんのおかげです。外国人観光客が増え続けている今、今度は私が温かく迎えられる存在になりたいと思います。

The Assumption Dance Company

ミリアム大学

PRECIOUS MEMORY!!

文学部 英文学科　２年生

私は、2019年の８月から12月までフィリピンのミリアム大学に派遣留学をしました。一人で海外に行ったことも、寮生活の経験も一度もなかった私は、出発前から不安とワクワクする気持ちでいっぱいでした。しかし、何事も積極的に行動をしようと決めていたので、イベントやオリエンテーションなどには自ら参加したりし、すぐにたくさんの現地の友人を作ることができました。そのおかげで、ホームシックも数日で乗り越えることができました。

授業については、私はコミュニケーション学部だったので、主にグループワークで話し合ったり、プレゼンテーションや討論会をしたりすることが多かったです。わかっていたことなのですが、やはり日本人がいなかったため悔しい思いも何度もしました。しかし、本当にみんな優しいクラスメイトばかりでわからなかった内容などを丁寧に教えてくれ、何度も助けられました。また私は、未経験のチアリーダーのクラブにも参加することに挑戦してみました。そこでは、英語だけでなくタガログ語という言語の壁にぶつかりましたが、チームメンバーが訳してくれたり、たくさんのあたたかい気遣いのおかげで最後のパフォーマンスも終えることができました。最後の日には、このチームに入ってくれてありがとうとコーチとメンバーに言ってもらえて本当に幸せな気持ちになりました。

大きく自分を成長させてくれたこの経験は、これからも一生の自慢で宝物です。

チアリーダー部のチームメンバーと

徳成女子大学

自分を見つめ直せた４ヶ月間

文学部 英文学科　２年生

今回の韓国、徳成女子大学への派遣留学を通して、自分の糧になる大変貴重な経験をすることができたと思います。留学前から多少の言語力はあったものの、日本でしていたようにどこかへ出掛けようとしても、根本的な違いのため戸惑うこともありましたが、それさえも自分にとっては貴重な経験なので楽しむこともできました。ですが、実際に海外で生活するにはその国の言語や規則や常識はもちろん、やはり英語力も必須であるということを知りました。海外からの留学生との交流を通して海外の人が見た日本はどのようなものなのか、政治的な話題であったり日常的な文化について会話したことがかなり新鮮な出来事でした。お互いに韓国語での会話のため、言いたいことをそのまま伝えきれないもどかしさを抱えながら助け合いつつ話しを進めたことにより、自分の勉強不足を実感し、より意欲を持って日々勉強しようという気持ちを保つことができました。４ヶ月間を通して、自分は必ず誰かに支えられながら生かされているのだとわかりました。家族はもちろん、韓国で出会った日本人の先輩、韓国人の学生や先生方など人との縁に恵まれ、辛いこともお互いに助け合えたので楽しく、意味深い留学になったのだと思います。今後は、目標である韓国語能力試験の勉強にもより力を入れて頑張りたいと思います。

徳成女子大学キャンパスの風景

研究所活動報告

◇講演会

2019年10月18日

「失敗する力
—グローバルな時代にこそ、必要なこと—」
博報堂コンサルティングアジアパシフィック
信岡 裕子 氏

◇助成・補助

◆出版助成　3件

1．“Adration”
2019年9月30日発売
音楽学科　辻井　淳 准教授

2．『中世歌題集成書の研究』
2020年2月29日発売
総合文化学科　藏中 さやか 教授

3．“Evoking Pan”
2020年2月25日発売
音楽学科　岡田　将 准教授
音楽学科　Xavier LUCK 准教授

◆体育・芸術活動助成　2件

1．「トリオ・フォンターナ 2019夏」
音楽学科　佐々 由佳里 教授

2．「田中修二ピアノ協奏曲の夕べ」
音楽学科　田中 修二 教授

◆研究助成　8件

1．How is cultural intelligence incorporated into intercultural communication programs at Japanese universities?
英文学科　奥村 キャサリン 准教授

2．コーパスを活用した日中対照研究
—日中同形自他動詞の分析—
総合文化学科　建石　始 教授

3．盛期ルネサンスおよびバロック美術揺籃期における中心と周縁に関する研究
総合文化学科　伊藤 拓真 准教授

4．ヘンデルのオラトリオ《メサイア》の演奏史
音楽学科　津上 智実 教授

5．温熱負荷が筋細胞のエネルギー代謝、Ca 動態に及ぼす影響
環境・バイオサイエンス学科　西田 昌司 教授

6．白色脂肪細胞からベージュ脂肪細胞への効率的な分化誘導
環境・バイオサイエンス学科　塩見 尚史 教授

7．日本統治下における甲子園の受容と意義
—台湾の嘉義農林の甲子園出場を手がかりに—
体育研究室　小坂 美保 准教授

8．インクルーシブダンスにおける実践研究
～地域交流事業としての評価検討の試み～
体育研究室　安田 友紀 専任講師

◆総合研究助成　3件

1．Textual Practices in English in the Asia–Pacific Region
英文学科　Corey WAKELING 准教授
英文学科　古村 敏明 准教授
英文学科　Goran VAAGE 准教授

2．宣教師文書の解読と解明
～1930年代前半のデフォレスト文書を中心に～
音楽学科　津上 智実 教授
総合文化学科　中野 敬一 教授
英文学科　白井 由美子 教授

3．ストレスによる生体応答の評価に関する領域融合的研究
環境・バイオサイエンス学科　横田 弘文 教授
環境・バイオサイエンス学科　西田 昌司 教授
環境・バイオサイエンス学科　塩見 尚史 教授

◆研究補助　1件

1．中古中世の私家集研究
総合文化学科　藏中 さやか 教授

◆地域貢献・活性化のための補助　1件

1．神戸女学院岡田山キャンパスにおける生物多様性インベントリー：昆虫相の解明
環境・バイオサイエンス学科　遠藤 知二 教授

◆専門研究会補助　3件

1．2019年7月26日
「象徴天皇の代替わりを考える
——歴史、政治、メディア」
名古屋大学大学院　河西 秀哉 准教授

2．2019年10月8日
"'Everywhere stone is gaining': Ill Seen Ill Said and Beckett's Geological Imagination"
Mark BYRON
Associate Professor, University of Sydney

3．2019年10月31日
"Universal Grammar and Language Development"
William SNYDER
Professor, University of Connecticut

◆専門部会研究発表会補助　3件

1．英文学科　2019年6月13日
"Spaces of Japanese Performance"
Goran VAAGE 准教授
Corey WAKELING 准教授

2．総合文化学科　2019年6月20日
「『諸民族の牢獄』から『われわれの帝国』へ：ハプスブルク君主国史像の変化と第一次世界大戦」
桐生 裕子 准教授

3．総合文化学科　2019年11月7日
「コムニタスと開かれた文化」
川瀬 雅也 教授

◆国際学会出張補助　6件

1．カナダ（カルガリー）　2019年7月
PSi（Performance Studies international）
＃25：Elasticity
英文学科　Corey WAKELING 准教授

2．アメリカ（サンディエゴ）　2019年11月
Pacific Ancient and Modern Language Association, 117th Annual Conference
英文学科　古村 敏明 准教授

3．カナダ（オンタリオ）　2019年7月
The LACUS 2019 Conference
共通英語教育研究センター
Kurtis McDONALD 准教授

4．スペイン（アリカンテ）　2019年10月
International Conference on Verbal Humor
英文学科　Goran VAAGE 准教授

5．アメリカ（ホノルル）　2020年1月
Hawaii International Conference on Education
英文学科　松尾　歩 教授

6．アメリカ（ニューオーリンズ）　2020年1月
Linguistic Society of America 2020 Annual Meeting
英文学科　立石 浩一 教授

◇発行物

『論集』第66巻第1号（通巻第182号）2019年6月発行
『論集』第66巻第2号（通巻第183号）2019年12月発行

（研究所）

女性学インスティチュート活動報告

◇特別講演会

・2019年４月26日
「アメリカにおける女性とキリスト教
――抑圧とエンパワメントの間」
東京女子大学　小檜山 ルイ 教授

◇連続セミナー

テーマ「母なるものの役割」（全４回）

〈第１回〉2019年６月７日
「キリスト教における母なるもの」
総合文化学科　大澤　香 専任講師

〈第２回〉2019年６月14日
「天皇の母たち」
総合文化学科　栗山 圭子 准教授

〈第３回〉2019年６月21日
「オペラの中の母たち」
音楽学科　松本 薫平 教授

〈第４回〉2019年６月28日
「現代家族の中の母」
心理・行動科学科　國吉 知子 教授

◇研究会

〈第５回〉2019年６月６日
「親愛なるレニーへ
レナード・バーンスタインとふたりの日本人」
ハワイ大学　吉原 真里 教授

〈第６回〉2020年２月26日
・「ジェンダー平等のための社会技術へ
―参加型アクションリサーチの実践例から―」
奈良女子大学　水垣 源太郎 教授

・「学校における〈ジェンダー平等教育〉の現在」
総合文化学科　奥野 佐矢子 准教授

◇学生懸賞論文（第21回女性学インスティチュート賞）

４編応募。
・最優秀賞該当なし。優秀賞２編。

〈優秀賞〉
・大嶋 美里さん（2019年３月文学部総合文化学科卒業）
「母性保護論争における山川菊栄」
・藤原 亜衣さん（2019年３月文学部総合文化学科卒業）
「〈歪んだ矯正〉からの離脱
―小島信夫「吃音学院」の改稿をめぐって―」

◇授業

Cu130ab　「女性学（Ⅰ）」
Cu134(1)(2)「女性学（実践編）」
Cu132(1)(2)「女性学（理論編）」
Cu131ab　「女性学（Ⅱ）」
Cu236ab　「ジェンダー学」
Cu235(1)　「ジェンダー・スタディーズ（Ⅰ）」
Cu335(2)　「ジェンダー・スタディーズ（Ⅱ）」
Cu237(1)(2)「ジェンダー学特論」

◇発行物

『女性学評論』第34号（2020年３月発行）

（女性学インスティチュート）

＜私の研究＞

私の研究

Nathaniel CARNEY

Broadly speaking, I am interested in the many factors that influence learners' development of second/foreign languages abilities. My current research has been focused in two main areas: second language listening comprehension processes (i.e., L2 listening comprehension) and second language vocabulary development (i.e., L2 vocabulary development). Researching listening processes presents unique challenges—listening processes occur invisibly, and characteristics of the listener, the speaker, the context, and other factors must be all considered in analyzing listening comprehension outcomes. My research on L2 listening aims to elucidate learners' L2 listening processes through discussing details of what learners' hear and why they hear it when attempting to comprehend spoken discourse in the second language. In this way, my research is a bridge between detailed psycholinguistic research about speech perception and general, test-related L2 listening comprehension research conducted by applied linguists. Aside from L2 listening, my other current research has focused on how second language learners use and acquire vocabulary. I have investigated how and why learners choose to use certain words and phrases in written and spoken discourse, and I have examined ways to enable students to better understand the frequency and usefulness of vocabulary that they are studying in the second language. Being a researcher of second language acquisition has provided enduring excitement and always encourages me as a second language learner and teacher. I enjoy being in a field in which the knowledge I gain through research is immediately applicable to pedagogical goals.

（英文学科准教授）

私の研究

三宅　志穂

私はいま、科研プロジェクトとして諸外国の動物園展示のデザインを科学教育の視点で読み解く調査研究に取り組んでいます。この年齢になって世界の動物園を訪ね歩くようになるとは思ってもみなかったのですが、近年、自然環境と人との関係性のあり方が重要な教育・研究課題になるにつれ、動物園という施設の重要性が再認識されてきたので７人の科学教育研究者で研究グループをつくり、動物園で展開される教育的側面の工夫を抽出することにしました。発見したことをいくつか紹介します。

IUCN レッドリストのランク標示が解説パネルに加わるようになりました。生態学的特徴に加えて、地球上から消えてしまうかもしれないという緊迫感を与える工夫です。また、個体の名前や性格、家族構成に加えて、赤ちゃんが生まれたとか、高齢や病気で亡くなったという情報にも出会いました。こうした情報は「手書き」で示されており、その内容とともに読み手には親近感を与えます。さらに、動物と人との間に水場を設けて自然な距離感をだす、アクリルパネルで透明にするなど、檻や柵が目に入らない工夫もされてきています。まるで手入れしていないかのような草木が茂る飼育展示場は動物のストレスを軽減する仕掛けだそうです。夜行性動物の姿に出会えるナイトズー、えさやり体験などのイベントもあります。現在の動物園では、動物本来の姿を伝えようとする臨場感的工夫が盛んにおこなわれていました。

学校以外の場で学ぶことのできるところはたくさんあります。研究を通して、施設や展示に備わる知的かつ情緒的刺激は何かという特徴付けをして、人々の学びに対する持続的関心につながる発見につなげたいと思います。

（環境・バイオサイエンス学科教授）

＜ゼミ紹介＞

人を知り、人と出会い、人との「しごと」を学ぶ場

金田　知子

私のゼミのテーマは「社会福祉」です。社会福祉とは、社会の人々のよりよい生活を実現するための制度や活動といえます。３年生では、社会で暮らす多様な人々の生き方や価値観への理解を深めることを目指します。そのための方法として、ライフストーリー・インタビューを用います。学生たちは、ライフストーリー・インタビューの理論と方法を学び、自ら興味のある人たちにインタビューを実施することになります。４年生では、大学での４年間の学びの集大成である卒業論文に取り組みます。精神障害者、貧困者、子ども、若者、女性、家族、高齢者などに関わる日本国内あるいは海外（特にアフリカなど）の福祉的課題のなかから、学生たちはそれぞれの興味・関心に沿ってテーマを決め、卒業研究を進めます。

社会福祉における「しごと」というのは、「（社会や組織に）仕える事」〔仕事〕ではなく、困難のなかでサポートを必要としている人たちを「支える事」〔支事〕といえるかもしれません。しかし、支えているはずの利用者から逆にたくさんの勇気や感動をもらうこと―つまり、「支えられる事」〔もうひとつの支事〕―もまた、社会福祉という「しごと」の醍醐味のひとつです。社会福祉を将来の職業にしたい、または社会福祉を学びたい、と考えている学生のために、私のゼミが、そうした「支え合う事」をまさに実体験できるような、一生の仲間と出会える場になってほしいと願っています。

（総合文化学科教授）

ゼミでのクリスマス

十人十色

田中　修二

私は、ピアノ実技を指導しているので、ゼミという概念はありません。グループで授業をおこなうことはなく、それぞれが個人レッスンをしています。しかしそれぞれの教員が指導している学生たちは、〇〇門下と呼ばれ、大学ではゼミのようなグループを形成し、私の学生たちは修二門下と呼んでいます。それは入学から卒業まで学年を超えて岡田山に住む家族の様に付き合っています。人生のそれぞれのページにそれぞれの音楽があって、学生は卒業後も自分自身で積極的にさらなるページを増やすことができるように魅力を伝えています。それは、大学でのレッスン時間のみならず、一緒にイタリアの音楽祭に出かけたりして様々な音楽に触れ、ことあるごとに皆で集まって食事したり、試験の前には学外で演奏会を開き、互いにその成果を実感し、泣いて笑って音楽と共にこの学生時代を過ごします。時には現実にはない音楽の中だけの経験も多々あって、それが学生の経験値を増やし立派な人間としての個性へと成長していきます。それは秋口にエクリプス羽で渡ってきた種類も雄雌の区別も付かない鴨が、それぞれの羽に生え替わって変身していくかの様に個性ある美しい色に変化していきます。ピアノを通じて修二門下生が次の世界へ羽ばたいていくことを願ってやみません。

（音楽学科教授）

今年の試験に向けての演奏会

＜課外活動紹介＞

［クラブ］ K.C. Press

編集長

K.C. Press の活動

神戸女学院大学 K.C. Press は大学公認の新聞部で、年に５回新聞を発行しています。今年で創刊25周年を迎えました。１、８面には神戸女学院大学に関する記事を掲載しています。

一見堅くて難しいイメージのある新聞ですが、身近な問題から難しい記事まで様々です。タピオカや大学祭について取り上げたこともあれば講演会や研究について取り上げることもあります。

また UNN 関西学生報道連盟に所属していて、２～７面は関西の９大学（京都大・大阪大・神戸大・関西大・関西学院大・同志社大・立命館大・神戸女学院大・京都女子大）のメンバーで協力して制作しています。たくさんの大学が関わることで、神戸女学院に留まらず関西の大学の記事を幅広く取り扱っています。週１回、自分の都合の良い日に阪急南方駅近くの共同編集室で活動するほか、不定期に K.C. Press の部員で昼休みに編集会議をしています。

入部するまで記事を書いたことがない部員がほとんどですが、先輩方に教わりながら執筆力を身につけていきます。昨年もたくさんの取材に行きました。特に思い出に残っているのは神戸女学院の講堂で撮影された、2020年公開予定の映画「にしきたショパン」の取材です。撮影現場の緊張感を肌で感じることができました。

K.C. Press は図書館新館や各学部事務室前、めぐみ会館などに設置しているので、ぜひお手に取ってご覧ください。

夏旅行の様子

［クラブ］ 農業研究会

代表

私たち農業研究会は地域創りリーダー養成プログラムから派生した部活動です。

学内では理学館の裏にある畑で季節ごとの野菜を育て、それを使ってイベントをおこなっています。岡田山祭では自分たちで育てたサツマイモを使い、パンケーキを作り販売しました。毎年、売り切れてしまうほど好評をいただいています。

学外では NPO 法人 LEAF こども環境活動支援協会さんと一緒に活動しています。

今年は、こども農業塾というイベントに参加し小学生の子どもたちと田植えや稲刈りをおこないました。また、収穫した野菜を使い子どもたちだけでカレーを調理し、親御さんたちに振る舞い日頃の感謝を伝えるのをお手伝いしたりもしました。年末にはしめ縄づくりを体験し、日本の古き良き文化に触れることもできました。自然と触れ合うことでリラックスすることかでき、失敗や成功をしながら作物を育てることで食のありがたみを感じることができます。子どもたちのサポートをするという立場で参加させてもらいましたが、私たち自身学ぶことが多く、成長することができました。

今年は農業の知識をより深く身につけるとともに、それを取り巻く環境のことまで考えられるようにステップアップしていきたいと思います。

これから下級生主体の部活動となりますが、新しいことにチャレンジしていきたいと思います。引き続き応援いただければ嬉しく思います。

学内の畑にて

学生の活動紹介
（コンクール受賞、学会発表など）

2019年度日本語教育学会秋季大会口頭発表
（2019年11月24日、松江）
BCCWJ における「トイイ」「バイイ」「タライイ」の使用実態
大学院 文学研究科 博士課程 1年生
（比較文化学専攻）

第11回漢日対比語言学研討会口頭発表
（2019年8月24日、中国西安）
日本語の「特別」と中国語の“特別”との対照研究
大学院 文学研究科 博士課程 1年生
（比較文化学専攻）

第22回「長江杯」国際音楽コンクール
ピアノ・大学の部 第1位及び審査員特別賞
（2019年8月18日）
音楽学部 音楽学科 4年生（ピアノ専攻）

第21回ショパン国際ピアノコンクール in ASIA
神戸地区大会 大学生部門 銅賞
（2019年11月24日）
音楽学部 音楽学科 1年生（ピアノ専攻）

第10回クオリア音楽コンクール 大学生部門
第2位（1位なし） （2019年12月15日）
大学院 音楽研究科 1年生（ピアノ専攻）

伊勢志摩国際ピアノコンクール2019 特別賞
（2019年10月3日）
大学院 音楽研究科 2年生（ピアノ専攻）

日本社会心理学会第60回大会（立正大学）
ポスター発表 （2019年11月9日）
コミュニケーション構造の違いが集団凝集性（魅力度）に及ぼす影響
大学院 人間科学研究科 修士課程 1年生

日本心理臨床学会第38回大会 ポスター発表
（2019年6月7日）
友人との関わりが対人依存欲求に及ぼす影響
大学院 人間科学研究科 博士課程 1年生

日本心理学会第83回大会 ポスター発表
（立命館大学） （2019年9月12日）
女性は化粧すべきか？
大学院 人間科学研究科 修士課程 1年生

日本心理学会第83回大会 ポスター発表
（立命館大学） （2019年9月12日）
怒りの表し方と夫婦関係満足度
―夫と妻の違いについて―
大学院 人間科学研究科 修士課程 1年生

第58回日本栄養・食糧学会 近畿支部大会 口頭発表
（京都大学） （2019年11月16日）
鶏肉のおいしさの要因について
―ブロイラーと京赤地鶏のムネ肉のスープの比較―
大学院 人間科学研究科 修士課程 2年生

ICoFF2019/ISNFF2019 ポスター発表
（開催日：2019年12月1日～5日・
会場：神戸国際会議場）
Effects of sake lees materials in the adipocyte differentiation gene expression
大学院 人間科学研究科 博士課程 2年生

『神戸女学院大学女性学評論』第34号（掲載予定）
日本人の化粧に対する意識
―女性の化粧義務の解消に向けて―
大学院 人間科学研究科 修士課程 1年生

日本理科教育学会近畿支部大会（和歌山大会）
（2019年11月30日）
展示デザインの特色から探る植物園における環境教育
人間科学部 環境・バイオサイエンス学科 4年生

第66回日本生態学会大会 ポスター発表
（2019年3月17日）
ドロバチ-寄生者関係の広域的空間分布：兵庫県における竹筒トラップ調査
大学院 人間科学研究科 修士課程 1年生

第67回日本生態学会大会 ポスター発表
（2020年3月7日）
近縁ドロバチ2種は寄生者を介して競争しているか？ 野外操作実験による検証
大学院 人間科学研究科 修士課程 2年生

地域自然史と保全研究大会
―関西自然保護機構2019年度大会― ポスター発表
（2019年3月3日）
兵庫県南部水系に生息するメダカの遺伝子型分布
人間科学部 環境・バイオサイエンス学科 4年生

食品化学工学会第20回（2019年度）年次大会
（かがわ国際会議場） ポスター発表
（2019年8月8日）
活性酸素種がミオグロビン構造に与える影響
大学院 人間科学研究科 修士課程 2年生

中高部報告

S演劇研究部で過ごした最後の舞台

高等学部　2年生

第63回兵庫県高等学校演劇研究会阪神支部発表会は、2019年11月8日(金)～11月10日(日)にかけておこなわれました。この発表会は、私たちS演劇研究部にとって年に5回ある舞台の中でも一番大きな舞台であり、S2にとっては一番最後の舞台です。そして、文化祭が終わってからの約2カ月の間に台本作りから練習、照明・音響決めをするという、スケジュール的にもかなりタイトで一番大変な舞台でもあります。その2カ月のなかでもかなりの時間を費やしたのが台本作りです。60分といういつもより少し長めの持ち時間の中で自分たちは何を伝えたいのか、どんな舞台にしたいのか。放課後の数時間では話がまとまらなくて、みんな家に持ち帰ってアイデアを考えて、永遠に台本ができないのではないか、と考えたことも一度や二度ではありませんでした。書類の提出期限ギリギリに決まった劇のタイトルは、「二度とは見ない太陽に」。本番直前までバタバタしていて、不安なこともかなり多く、優良賞で神戸女学院の名前が読み上げられたときは嬉しさよりも驚きの方が強かったほどでしたが、タイトルに負けないぐらい雰囲気のある舞台を作りあげられたのは、台本や、演出、衣装など、部員のみんなが出してくれた多彩なアイデアのおかげです。

最後になりましたが、練習の際たくさんの批評をくださった先輩方、顧問の先生方、裏方を手伝ってくれた文化部の2人、その他支えてくださったすべての方に感謝します。

第5回京進英語エッセイコンテストの報告

中学部　3年生

私は第5回京進エッセイコンテスト英語エッセイ部門に参加させていただきました。このコンテストはテーマに沿ってエッセイを書いて応募するというものです。

今回のテーマは「協働」でした。最初は何について書いたらよいのかさっぱりわからず、下書きを書いてはまた書き直すという動作の繰り返しでした。私にとって「協働」という言葉は、働くという字が入っているため、仕事というイメージがあり、あまり親しみを持てませんでした。しかし、辞書や協働について書かれている本を読んだりして調べていくうちに、私が勝手に思い描いていた「協働」は狭い意味での「協働」であると分かり、働くという字が入っているから仕事関係という自分の固定観念に対し、恥ずかしく思いました。私は今回、自分の実体験も交えて書きました。一番難しかったのは自分がその時に感じた抽象的な感情を具体的な言葉として表現するということです。英語で400語程度という長文を書いたのは初めてで、書き終わった時に達成感はありましたが、正直賞をいただけるとは全く思っていなかったので最優秀賞というお手紙をいただいたときはびっくりしました。

そして、何回も私のつたない英語のエッセイを添削してくださった英語科の先生方、応援してくれた家族を含め、関わってくださったすべての方々に感謝しています。本当にありがとうございました。

ポーランド共和国訪問報告

高等学部　１年生

2019年12月21日（土）から29日（日）までポーランドのクラクフを訪問しました。

到着した翌日にヴィエリチカ岩塩坑を見学し、３日目にはアウシュヴィッツ収容所を訪問しました。ガイドの方が繰り返し仰っていた、「ホロコーストは、自分の身近な人を他の人よりも少し大切に思う気持ちから生まれました。私たちの中にも普通にある感情ですね。私たちは、世界を平等に見る目を持たなければいけません」という言葉が強く印象に残っています。お話を聞きながら収容所内を回るうちに、私は自分のものの見方がすでに平等なものではないことを思い知りました。そして、この訪問に参加しなければそのことに気付かないままであったということを非常に恐ろしく感じました。

ホストファミリーやご近所の方は明るく優しい方々で、温かく歓迎してくださいました。ホームステイ中は、クリスマスに伝統料理を作ったりミサへ参加したりと国の文化や歴史を沢山教わりました。また、一緒にプログラムへ参加したポーランドの高校生には英語を流暢に話す人が多く、とても良い刺激を受けました。３月にはポーランドの学生が日本を訪問する予定です。その際には、今度は私が日本の文化について伝えていきたいです。

今回のポーランド訪問は本当に貴重な経験となりました。この機会を与えていただけたこと、そしてポーランド・日本両国の先生方、学生、家族や支えてくださった方々、全てに感謝しています。

校内読書感想文コンクールについて

今年度も夏休み中、Ｊ２とＳ２は宿題で、その他の学年は自由参加で校内読書感想文コンクールをおこなった。先生方から推薦された優秀作を、図書委員の先生方が審査して、入選作を決定した。2019年12月16日（月）の礼拝時に、校内コンクールの表彰式をおこない、Ｓ２Ｃの生徒が自作の朗読をした。

また、校内選考で決定された優秀作は第47回兵庫県私立学校読書感想文コンクールへ応募し、特選（３名）、入選（３名）に入賞した。さらに、第65回青少年読書感想文兵庫県コンクールにおいて、Ｓ２Ｃの生徒が毎日新聞社賞を受賞した。

（中高部図書室司書教諭）

釜ヶ崎訪問報告

高等学部　２年生

2019年11月15日（金）、私たちＳ１からＳ３の12名は、釜ヶ崎にて炊き出しをおこないました。集合駅である花園町を出てからはしばらくどこにでもあるような景色が続きましたが、少し路地に入るとやはり、日常とは全く違う異質な空気を身にまとったのを感じました。

はじめに「いこい食堂」に集合し、自分たちでおにぎりをつくり、それを三角公園で配りました。はじまる前から公園には長い列ができていたこともあり、思っているよりゆっくり目を見ておにぎりをくばることはできませんでしたが、かろうじて見ることのできた労働者の方の手には、それぞれの方々の苦労がはっきりと刻み込まれており、厳かさを感じそれと同時に自分のきれいな手が見えた時には、自分の無力さを実感しました。奉仕する目的でおこなわれているこの行事のその奉仕という形は自分がたまたま恵まれた環境にいるという偶然の事実から生まれるもので、自分たちが分取っている分を分けるという、当たり前のことをしているだけなんだと自分のそれまでの考えが間違いだったことにはじめて気づいた時、自分の視野の狭さが浮き彫りにされたような気がして恥ずかしかったです。

釜ヶ崎訪問にずっと参加してみたいと思っていましたが、参加が決まってからはまだ自分は行くに値しない人間ではないかと軽々しい気持ちで参加することを決めたことに不安でした。しかし米加田先生が、一から丁寧に色々なことを学ばせてくださったおかげもあり、今では心から参加して良かったと言えます。せっかくのこの貴重な経験を忘れることなく留めておくことが私たちの責任ではないかと思います。

冬山スキー

今年度の冬山スキーも、３泊４日の行程で、長野県志賀高原一ノ瀬スキー場でおこなわれました。生徒44名と教員８名は、雪の少ないスキー場に雪が降ることを願いながら、バスに乗っていました。

到着すると、宿の前のゲレンデには雪は十分に無く、残念ながらリフトは動いていませんでした。そして、翌日から２日半の講習がはじまりました。結局、全日、宿の前のリフトが動かなかったため、隣のスキー場まで途中歩いたりしながら移動することになりました。

講習２日目は、少しの降雪のおかげで宿まで滑って帰れるようになり、少しずつ状況は良くなってきました。また、上級者は熊の湯スキー場にバスで移動し、滑ることができ良かったです。

この日の夜は雪がしんしんと降り、ホワイトクリスマスの中をクリスマス礼拝、クリスマス祝会を存分に楽しむことができ、忘れられない夜になることでしょう。

最終日は、高天原ゲレンデや一ノ瀬ファミリーゲレンデのクワッドリフトは動きましたが、上級コースのみで、長い滑りがいのある初級者用の林間コースは、残念ながら閉鎖で滑れず仕舞いでした。

20年ぶりの雪の少なさがあり、滑れるゲレンデは限られましたが、雪がない分得るものがあり、「one team」のもと教員、生徒とも協力し合って楽しみ、無事終えることができました。感謝です。

（冬山スキーディレクター）

中高部「卒業生シリーズ礼拝」報告

中高部では、学院での学びの意味や教育の土台にキリスト教があることを確かめる機会になることを願って、毎年、卒業生を招いての礼拝を守ってきました。

今年度も、５名の方をお招きいたしました。

土見彩氏（134回）からは、ご自身の中高部での経験や大学での経験を通して、チャレンジすることの大切さと、その備えの時の大切さについて話していただきました。ご自身の経験を踏まえて、「先輩や友人の姿を見ていると、何かに挑戦しなければという焦りを覚えることもあるが、無理に挑戦する必要はないのではないか。見つからない時には、自分の関心を深めるような時間を過ごすことも大切なのだろう」と話してくださいました。

改正咲樹氏（134回）からは、クラブ活動や学校行事に打ち込み、自らの課題と取り組んだ経験を通して学んだリーダーシップのあり方や、役割の果たし方について話していただきました。

田上文子氏（106回）からは、ヨセフの生涯を通して、試練の時にも神は必ず共にいてくださるのだと語っていただきました。田上氏は、今から４年前に牧師になられたということで、ご自身の人生を振り返りながら、共にいると約束してくださる神を信じて歩むことの心強さを伝えてくださいました。

足達賀代子氏（98回）からは、高等学部を卒業する時に英語科の先生から送られた「花束のような６年間」という言葉について話していただきました。この「花束」という言葉は成果という意味ではなく「神の恵み」という意味で理解するのがふさわしいのだと確信するようになった経緯を話してくださり、学院での経験をそれぞれの「花束」として携えてゆくのだというイメージを共有する礼拝となりました。

日程の都合でこの報告には間に合いませんでしたが、辻一七子氏（134回）もお招きすることができました。その他にも中高部では卒業生の教員、職員が奨励を担当しており、神戸女学院での学びの意味を確かめる時が与えられています。

中高部では卒業生から学ぶ機会をもとうと考えて、キャリアガイダンスや宗教強調週間での放課後特別プログラム「白熱教室」という企画でも卒業生との語らいの会を守っています。卒業生の活躍ぶりは在校生にとっては大きな励みになっています。また、卒業生が語る学院生活の意義は、在校生にとっては自らの歩みを振り返るためのきっかけになっていると感じます。時折、在校中や卒業後の苦悩や迷い、挫折の経験が語られることもあります。卒業生の語るこうした言葉にも多くの生徒が共感し、希望を抱いているようです。

卒業生シリーズの担当者の多くの者が在校中に使っていた聖書、讃美歌を家庭科の授業で作った鞄に入れて持参してくれます。進学先の下宿にも聖書、讃美歌を持っていったという生徒も少なくありません。そうした姿に触れながら、在校中に出会った聖句や讃美歌が卒業後の人生においてもよき導きをなしているのだと感じます。

卒業生シリーズのような機会を通して、これからも学院生活の意義や価値を確かめてゆきたいと願っています。

中高部では「礼拝前の静寂を大切にしよう」という呼びかけがなされており、礼拝開始までの数分間は全校生徒でパイプオルガンの前奏に心を響かせています。この呼びかけも、礼拝前の静寂を祈りのための静寂として語る先輩たちがいたからこそもたらされたものであるということを確かめてゆきたいと考えています。

「あなたの隣には家族や友人のために祈っている人がいるかもしれません。いつかあなた自身が家族や友人のために祈る時がくるかもしれません。だからこそ、礼拝前の静寂を大切にしましょう」という呼びかけが生徒自身によってなされ、その呼びかけに応えるようにして静寂の時が守られ、今の時代に受け継がれているのだということを折に触れて確かめてゆきたいと願っています。

ご奉仕くださった皆様に心から感謝いたします。

（中高部チャプレン）

＜先輩からのメッセージ＞

自分だけの感性を探す

津川　恵理
（中高部卒業）

建築家として生きていく日々に、一番大切なことは既存の概念を疑うことだと感じています。当たり前な日常を今一度疑ってみる。本当にこれでいいのか、もっと良い日常への提案があるのではないかと、常に自問自答をする毎日です。そのような考えに至ったのも、神戸女学院中高部時代に先生に言われるからではなく、生徒同士で議論をし、体育祭や文化祭、部活動などの活動の中で、自らの答を見つけていく校風で培われたものだと感じています。制服がないことで思春期に自己表現をする機会があり、他人の眼よりも自分の感性を大事にし、それぞれの個を尊重できる神戸女学院ならではの学校生活は、創造力を掻き立てられました。社会人３年は日本で働き、４年目に思い切ってニューヨークの建築家事務所で働くことを決断できたのも、自分の感性を大事にできたからだと思います。校風である「自由と自治」は、自己の拡張をおこなうことができ、同時に責任も伴うということを教えてくれました。今、神戸市の三宮駅前広場の設計に携わらせていただいていますが、私にしかできないデザインを今後も探究し、社会に切り拓いていく建築家となれるよう、努力し続けたいと思っています。

神戸市主催さんきた新アモーレ広場最優秀賞案、
2021年春竣工予定

マロニエ賞受賞

マロニエ賞は兵庫県私学に在籍し、文化・スポーツ等の大会で全国１位あるいは世界３位以内に入賞した生徒に県知事から授与される賞です。今年度は本校生６名を含め、20校の37個人、15団体が受賞しました。S３　２名、S２　３名は2018年11月イェール大学にて開催の The World Scholar's Cup 決勝大会で多数のメダルを獲得しました。この大会は中高生が３名１チームで協力し、６分野について debate, essay writing, paper test, quiz の４種目でリベラルアーツ的な教養を競う国際大会です。個人獲得賞の内訳は、１名が Scholar's Challenge の特別科目と歴史で金メダル、社会、音楽美術、科学、文学で銀メダル、１名が特別科目と文学で金メダル、１名が文学で銀メダル、１名が文学、歴史、社会で金メダル、音楽美術、科学で銀メダル、１名が社会で銀メダルです。団体としても Team Quiz で、他校生徒とチームを組んだ１名が金メダルを、３名のチームが銀メダルを獲得しました。中２の生徒は第43回スポーツチャンバラ世界選手権大会レディース楯小太刀１～10級の部で優勝し、昨年に引き続き受賞しました。今後もそれぞれの賜物を育み、挑戦を続けられるよう祈念します。

（中高部長　林 真理子）

第54回中高部長賞
第35回文化・スポーツ賞

今年度の第54回中高部長賞表彰式は、現在すべてのＳクラブＳ３学年の引退が１学期であることを踏まえ、ＪとＳで時期を変え、Ｓは2019年７月12日(金)の１学期終業日に、Ｊは2019年12月20日(金)におこなわれました。

Ｓは軽音楽部、バスケットボール部、バレーボール部、バドミントン部の４クラブ、Ｊは書道部、バレーボール部の２クラブがそれぞれ受賞されました。受賞クラブには表彰状と盾、副賞の５千円が贈呈されました。

第35回文化賞・スポーツ賞表彰式は2020年１月31日(金)におこなわれ、受賞者には中高部長林先生から表彰状とメダルが贈呈されました。文化賞・スポーツ賞は、学校代表として各大会やコンクールへ参加し、顕著な成績を収めた個人、団体に授与されるものです。賞の基準は西宮・阪神地区で第１位、兵庫県・近畿・全国、世界で第３位以内とするものであり、選考委員で審議し授賞者をそれぞれ決定しました。

中高部長賞、文化・スポーツ賞は、生徒のクラブ活動や、学校生活での活性化を願い、生徒の努力を称えることが目的であります。来年度もたくさんの受賞者が選出されることを願っています。

施設課の方々には表彰式にふさわしい会場を設営していただきました。この場をお借りして御礼申し上げます。

第54回中高部長賞

Ｊ書道部、Ｊバレーボール部、Ｓ軽音楽部、
Ｓバスケットボール部、Ｓバレーボール部、
Ｓバドミントン部

第35回文化賞（33名）

☆第24回全日本高校・大学生書道展　優秀賞
☆神戸女学院大学第10回絵本翻訳コンクール　佳作
☆第58回全国高等学校生徒英作文コンテスト
　２、３年生の部　優秀賞
☆第35回成田山全国競書大会　読売賞（全国３位相当）
☆第65回青少年読書感想文兵庫県コンクール
　毎日新聞社賞
☆阪神ESSユニオン・シナリオ・リーディング・コンテスト　優勝
☆ The World Scholar's Cup 2019 Tournament of Champions　団体　Scholar's Bowl　銀メダル
☆ The World Scholar's Cup 2019 Tournament of Champions　個人　Scholar's challenge
　〈History〉銀メダル
☆ The World Scholar's Cup 2019 Tournament of Champions　団体　Team Writing　銀メダル
☆ The World Scholar's Cup 2019 Tournament of Champions　個人　Scholar's challenge
　・〈Social Studies〉銀メダル
　・〈Literature〉金メダル
　・〈Art〉金メダル
☆ The World Scholar's Cup 2019 Tournament of Champions　個人　Scholar's challenge
　・〈Individual Writing〉金メダル
　・〈School top Scholar〉金メダル
☆日本地学オリンピック本選　銅賞ならびに地球惑星科学連合賞（女子１位）
☆第21回あけてニッコリ!!わくわくお弁当コンテスト　最優秀賞
☆ウキルミナ杯・毎日ウィークリー杯関西女子中学生英語暗唱大会　優勝
☆薫英杯女子中学生英語スピーチコンテスト　第３位
☆第５回京進英語エッセイコンテスト　英作文部門　優秀賞
☆第５回京進英語エッセイコンテスト　英語エッセイ部門　最優秀賞
☆第14回全日本小学生、中学生書道紙上展　中学生の部　全国ベスト100
☆第21回正筆会全国学生公募誌上展　正筆大賞
☆税の書道　西宮・宝塚租税教育推進協議会賞
☆税の書道　西宮納税貯蓄組合連合会会長賞
☆中学生の税についての作文　西宮税務署長賞
☆中学生の税についての作文　阪神南県民センター長賞
☆中学生の税についての作文　西宮市長賞

第35回スポーツ賞（19名）

☆第44回世界選手権大会 SPOCHAN WORLD CHAMPIONSHIP　レディース小太刀１～10級の部　優勝

☆第６回兵庫県中学校冬季テニス大会（団体戦）第２位

☆第63回兵庫県中学校総合体育大会テニス競技　団体第３位

☆第16回兵庫県中学校秋季テニス大会　学校対抗の部　第３位

2020年度中学部入学試験結果報告

日程：2020年１月18日（土）・20日（月）

募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	手続完了者数
135	240	240	153	145

（中高部事務室）

＜課外活動紹介＞

［クラブ］ **Ｊサッカー部**

部長

Ｊサッカー部は月、火、木、金、第２・第４土曜日に、Ｊ１とＪ２合わせて18人で活動しています。先輩・後輩の仲が良く、毎日賑やかで楽しいところがサッカー部の魅力です。

サッカーは手が使えないなかで、どうやってボールをつなぎ、味方に道を切り開くかを考える、とても面白いスポーツです。また、個々の力で強いほうが勝つのではなく、11人で強いほうが勝ちます。だからこそ、私たちはチームみんなで勝つために練習をしています。

サッカー部は誰もが自分の居場所を見つけることができる、アットホームで楽しいクラブです。

［クラブ］ **Ｊ家庭科研究部**

部長

Ｊ家庭科研究部は月、火、木曜日の週３日活動し、季節ごとのお菓子を作ったり、学校行事のための手芸作品を作ったりしています。

春には愛校バザーで販売する作品作り、秋に向けては文化祭、キャンパス見学会の準備、冬は施設の子どもたちへのクリスマスプレゼントを用意します。

年に一度の夏合宿では、校外で和菓子作りや組紐作りなど貴重な体験ができるので、皆楽しみにしています。活動内容は皆で話し合って決め、作品を作り上げてゆくごとに部員が仲良くなれる素敵なクラブです。

［クラブ］　**Ｓブラスバンド部**

高等学部　２年生

Ｓブラスバンド部は現在32人が所属しており、年に５回の校内舞台と体育祭のファンファーレや始業式での演奏、その他２回の校外舞台に向けて、週４～５回活動しています。部活が忙しい分一緒に過ごす時間が長いので、部員同士の仲が良く、アットホームな雰囲気で練習に励んでいます。近年は西宮市の定期演奏会にも参加するようになり、他校の吹奏楽部の人と交流が持てるのもこのクラブの魅力です。部員全員で１つの舞台を作り上げる楽しさや達成感は、かけがえのない思い出になります。

［クラブ］　**Ｓ華道同好会**

部長

神戸女学院の華道部の魅力

Ｓ華道同好会は、Ｓ１、Ｓ２合わせて18人で毎週月曜日に活動しています。一般に「華道」と聞いて思い浮かぶ、おしとやかなイメージとはかけ離れた、底抜けに明るい和気あいあいとした雰囲気の中、優しい先生方や友人、先輩後輩などと楽しくおしゃべりをしながら、純粋にお花を生ける楽しさを学んでいます。文化祭では、たくさんの方が華道同好会の作品を見に来てくださいました。神戸女学院ならではの華道同好会の雰囲気をこれからも守っていきたいと思います。

〈学 院 日 誌〉

1月7日(火)	中高部始業日
1月8日(水)	中高部教員会議
1月17日(金)	教授会
1月18日(土)～19日(日)	大学入試センター試験
1月18日(土)・20日(月)	中学部入学試験
1月22日(水)	理事会
1月29日(水)	文学部・人間科学部一般入学試験〈前期A日程〉 中高部教員会議
1月29日(水)～30日(木)	音楽学部一般入学試験〈前期A日程〉
1月30日(木)	文学部・人間科学部一般入学試験〈前期B日程〉
2月12日(水)	中高部教員会議
2月15日(土)	文学部・人間科学部一般入学試験〈前期C・D日程〉
2月21日(金)	教授会
2月26日(水)	理事会 中高部教員会議
2月28日(金)	高等学部卒業式（日程変更） ※新型コロナウイルス感染症に対する政府の要請により予定変更 中高部臨時教員会議
3月2日(月)～19日(木)	中高部臨時休校
3月3日(火)	中高部臨時教員会議
3月5日(木)	教授会
3月7日(土)	文学部・人間科学部一般入学試験〈後期日程〉
3月13日(金)	中高部教員会議
3月18日(水)	大学卒業式、大学院修士学位記授与式（中止） ※新型コロナウイルス感染症対策のため中止
3月19日(木)	中学部卒業式、終業式（中止） ※新型コロナウイルス感染症に対する政府の要請により予定変更
3月21日(土)	オープンキャンパス（中止） ※新型コロナウイルス感染症対策のため中止
3月25日(水)	理事会 評議員会 臨時理事会

目　次

One in Christ の学びから揺るがぬ展望へ……1
KCC だより……3
2020年度年間標語……4
クリスマス報告……5
史料室の窓・キャンパス探訪（5）……14
キャンパスお気に入りの場所……16
大学報告
「話す、伝える、伝わる」……17
ラグビーワールドカップボランティアで得たもの……17
国際女性ビジネス会議……18
日本とフィリピンでの文化・価値観の違い……18
岡田山集会所の女学院カフェ……19
舞踊専攻第11回卒業公演……19
第10回絵本翻訳コンクール表彰式……20
「神戸女学院の100冊」書評コンテスト……20
神戸女学院大学音楽学部定期演奏会2019……21
2020年度大学入試結果中間報告(2/25現在)……44
留学生紹介……45
派遣留学報告……47
研究所活動報告……50
女性学インスティチュート活動報告……52
私の研究……53
ゼミ紹介……54
課外活動紹介……55
学生の活動紹介……56
中高部報告
S演劇研究部で過ごした最後の舞台……58
第5回京進英語エッセイコンテストの報告……58
ポーランド共和国訪問報告……59
校内読書感想文コンクールについて……59
釜ヶ崎訪問報告……61
冬山スキー……61
中高部「卒業生シリーズ礼拝」報告……62
先輩からのメッセージ……63
マロニエ賞受賞……63
第54回中高部長賞、第35回文化・スポーツ賞……64
2020年度中学部入学試験結果報告……65
課外活動紹介……66
学院日誌……68

下記ページは個人情報保護等のため掲載しておりません。ご了承ください。
7, 15, 22, 35, 37, 42, 43, 49